

▶トヨタが発表した一人乗りの「PM」はパーソナル・モビリティの略。乗るといふよりは「着る」感覚のウェアラブルカーだ。



第37回東京モーターショー(2003)～乗用車・二輪車～

「いま挑む心。Challenge & Change —希望、そして確信へ—」



～整備業界と新技術～

今回のショーは「近未来」、「環境・エコカー」、「IT技術」がキーワードになっている。これまでのショーでは『未来の夢の車』が多く登場してきた。が、年々技術革新のスピードが上がり、市販車への新技術投入サイクルも早くなってきているため、『未来の夢の車』とは一概に言えないのだ。

やはり今回最も多かった新技術は、ガソリン・軽油以外の原動機。ハイブリッドカーや電気自動車、水素ロータリーエンジンの姿も見える。

また、車が状況を判断し、運転をサポートする。車同士がコミュニケーションをし、事故を防ぐ。車内から指先一つで公共料金の支払いを済ませ、最新の音楽・映画を手に入れる。エンジンをかけるためには指紋をチェックする…もはや自動車は「機械」ではなく、「電子要塞」に様変わりしている。

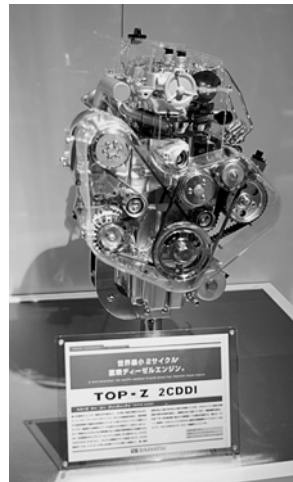
近未来、上記を司る部品が故障した場合、対応できる自整備業者になっておきたい。

仮に、このモーターショーで公開されている新技術が全て現実のものとなり、市販車へと導入されれば、「整備」・「交換」・「板金」全ての業務が一新せざるをえない。将来、業界が発展するため、

▶軽の燃料電池自動車も展示されていた▶



▶1〜2人乗りの超小型自動車をはじめ、新型原動機を搭載するなど新技術の結晶とも言えるコンセプトカーの数々。5年以上に製品化される予定のものが多いという。



▶ヤマハが発表した「永久磁石」を組み込んだコンセプトバイク。



新聞・TV各種メディアでは華やかな映像と溜息の出るような新技術が報道され、近未来の自動車社会を夢見させてくれるイベントだ。

しかし、冷静に考えてみよう。我々がこのモーターショー展示車のうち、何割の新技術へ将来対応することが出来るだろうか。

特殊工具・コンピュータ…我々が現在直面している難問が更に大きく、更に速度を増して迫ってくるのだ。今回は東京モーターショーを違った側面から見てみることにする。

いや、整備事業者が生きるためには「新技術の対応と習得」が不可欠となってきているのだ。

「うちでは整備できません」そう答える時の「歯がゆさ」「悔しさ」をバネにして、学ばなくてはならない課題がそこにある。

「ガソリン・軽油の原動機がこの社会から消えたとき、どれだけのお客様が自分の工場に来るのか」そう問われたとき、自信を持って「大丈夫」と答えられるようになりたいものだ。

濁流の如き時流は我々を飲み込もうとしている。「法定需要からの脱却」などという言い古されたスローガンでは対応できない時代がそこまで来ている。

自動車整備業はサービス業と技術職の両側面を持つ、非常に高度な職業へと進化している。努力を惜しまない気概があってこそ自整業は発展し、誇りを持ち続けることができる。

会場を去る我々の背後に「いま挑む心。Challenge & Change —希望、そして確信へ—」そう書かれたモーターショーの垂れ幕が、たなびいていた……。



▲産学共同開発中の電気自動車『エリカ』。リチウムイオンバッテリーを搭載し、時速400kmで走行することができる。



◀自動車とITの融合が一気に一般ユーザーへ浸透するきっかけとなるのはやはり、オーディオ・カーナビからだろう。写真はインターネットができるカーナビゲーションシステム。

▶指紋認証で自動車のエンジンをかけたり、施錠開錠ができる設備が紹介されていた。

